

総合的な探究の時間

「総合的な探究の時間」は、各学校において育成を目指す資質・能力や学校の特色によってその目標が決まるため、この時間の教育活動が創意工夫に満ちた豊かなものになるよう、各学校で組織的に授業改善を進めているところである。「総合的な探究の時間」において育成を目指すべき資質・能力がその高等学校のスクール・ミッションを体現するものであり、学校全体で教職員が連携してその実現に向かっていくことが必要である。その中で県立高校改革実施計画(Ⅲ期)における教育課程研究開発校が、「総合的な探究の時間」に係る研究(令和7年度～令和9年度)指定校として11校指定された。全般的な研究として6校(市ケ尾、横浜清陵、藤沢西、秦野総合、大和、津久井)、SDGsをテーマとした展開に係る研究として5校(川崎、舞岡、大船、山北、有馬)が研究を行っている。どの学校においても組織的な取組として、「総合的な探究の時間」をカリキュラム・マネジメントの中核として進めていくために、各教科・科目等との関わりを意識しながら、学年・教科等を横断して学校全体で組織的に研究を進めている。

「総合的な探究の時間」の研究報告では、県立高校指定校事業の取組を掲載しており、指定校事業開始初年度(平成31年度)から各学校の活動を発信している。

今年度は、各学校が指定期間(令和7年度～令和9年度)の初年度として、研究のねらいである「自ら課題を発見し解決する探究の学び」について、各学校のテーマに沿って、研究を推進してきた。今回は、2校(津久井高等学校、山北高等学校)の実践事例とその工夫についてまとめた。

● 津久井高等学校

1 研究テーマ

(1) 研究テーマ

地域を理解し、地域に貢献する人材の育成を目指し、探究プロセスによる課題解決能力を身に付け、「総合的な探究の時間」を中核として教科等横断的な教育課程を実践し、組織的な探究活動の充実を図る。

(2) 研究のねらい

探究プロセスによる課題解決能力を身に付けられる授業実践を目指すとともに、これまでの研究成果を組織的に継承していくための仕組みを研究する。

2 実践事例

(1) 単元の指導と評価の計画

ア 単元名：地域探究「届けよう服のチカラ！プロジェクト」ゼミ

イ 単元の目標：課題をよりよく解決する方法を探究する取組を通じて、地域と連携する重要性を理解し、主体的に社会に貢献する態度を身に付ける。

ウ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・ 難民を取り巻く状況について理解している。① ・ 難民の生活で起こりうる困難に対し、自分ができる支援の方法について分析している。② ・ 難民の問題をはじめ、社会課題の解決に取り組むことの大切さを理解している。③ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゼミの活動を通じて気付いた疑問を基に、課題を明確化している。① ・ 自らが導き出した疑問について情報を収集している。② ・ 収集した情報を中間発表に向けて整理・分析している。③ ・ 中間発表に向けて、自身が作成する資料に整理・分析した内容をまとめ、表現している。④ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 難民の問題を始め、社会の課題に対し、他者の考えなども参考に、自分ができることを追究しようとしている。① ・ 自分の意志で課題に向き合い、地域の小学校と連携するなど、協働的に課題に取り組もうとしている。② ・ ゼミの活動を通して社会の形成者としての自覚を持ち、社会に貢献しようとしている。③

エ 単元の指導と評価の計画

次	時	学習活動	知	思	態	評価のポイント・指導上のポイント
1	1	<p><課題の設定></p> <ul style="list-style-type: none"> 「届けよう服のチカラ！プロジェクト」ゼミについて、教員のガイダンスを聞き、学習の流れを理解する。 				<ul style="list-style-type: none"> ガイダンスでは、画像を増やしたり、具体的な説明を行ったりすることで、学習の流れを理解しやすくなるよう留意する。
	2	<ul style="list-style-type: none"> 社会貢献に取り組む民間企業から招いた外部講師の講義を受講し、難民を取り巻く状況や、服を送ることが難民の支援につながることに、現地に服を送る流れ等を理解し、記録用ワークシートにまとめる。 難民支援の課題を考え、記録用ワークシートにまとめる。 	①	①		【知①・思①：記録用ワークシート】
2	1	<p><情報の収集(計画)></p> <ul style="list-style-type: none"> 難民の現状や課題に対し、自分ができる支援の方法について分析し、服を集めて難民を支援することの意義について考える。 地域の小学校で服を回収した昨年度の取組について、教員の説明を聞く。 	②			<ul style="list-style-type: none"> 難民支援の方法を評価するため、コストや時間などの視点を生徒に提示する。 【知②：観察(発言や取組)】
	2	<ul style="list-style-type: none"> 今年度も訪問する該当の小学校について、グループでインターネット調査を行い、学校の現状や子どもたちの様子について、情報を収集する。 		②		<ul style="list-style-type: none"> 調査が進んでいないグループには、難民支援の方法を紹介しているウェブサイト等を教え、適宜支援する。 【思②：観察(発言や取組)】
	3	<ul style="list-style-type: none"> 訪問する学校の現状を踏まえ、昨年度の取組に改善を加えた服の回収方法を話し合う。回収を案内するポスターを作成する。 			①	<ul style="list-style-type: none"> 適宜机間支援を行い、訪問する学校の現状を踏まえたポスターになるよう助言する。 生徒同士のやり取りが進むよう、適切に介入する。 【態①：観察(発言や取組)】
3	1	<p><情報の収集(活動)></p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の小学校を訪問し、服を集めて難民の支援に取り組んでいることについて、プレゼンテーションする。態② 自分たちが作成したポスターと、服を回収する箱を設置する。 プレゼンテーションを振り返り、社会課題の解決に取り組むことの大切さを理解する。知③ 	③		②	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶や服装、立ち居振る舞いなどについて事前指導を行う。 プレゼンテーションの準備の段階で小学生の発達段階の特徴等に配慮するよう指導する。 【知③・態②：振り返りのワークシート】
	2～4	<ul style="list-style-type: none"> 地域の小学校から集めた服を整理し、民間企業のガイドラインに従い、難民支援に送付できる服を選別する。 	③			<ul style="list-style-type: none"> 選別指標を目視しながら服の選別ができるよう配慮する。 【知③：振り返りのワークシート】

4	1 ～ 3	<整理・分析> ・これまでの活動を整理・分析し、発表の準備として、整理・分析した内容をスライドにまとめる。		③	・スライドの操作でつまづくことが多いため、複数教員でサポートする。 【思③：観察(取組)】
	1 ～ 2	<まとめ・発表> ・中間発表として、整理・分析した内容を発表する。		④	・評価シートを配付し、生徒の評価を集め、生徒が自分の発表を振り返ることを支援する。 【思④：観察(取組)】
5	3 ～ 4	・これまでの活動や評価シートを基に、中間発表を振り返り、社会貢献の大切さや今後の取組について考え、年度末の発表に向けて、どのように修正するかを考え、振り返りのワークシートに記述する。		③	【態③：振り返りのワークシート】

オ 授業実践例(3時間目/16時間)

学習活動	評価の観点 (評価方法)
1 導入 ○教師の説明を聞き、前時に実施した民間企業の外部講師による講義を振り返る。 2 展開 ○支援方法の分析 ・3人程度のグループをつくり、難民の課題をもとに、インターネットでの調査なども行い、様々な支援の方法を調べる。 ・グループごとに自分たちで調べた支援の方法を発表し、全体で共有する。 ・グループごとに支援の方法について自分たちが実行可能な支援かどうか考え、評価する。 3 まとめ ○評価することを通じて、服を集め、届ける支援方法の意義について考える。	・難民の生活で起こりうる困難に対し、自分ができる支援の方法について分析している。 【知②：観察(発言や取組)】

研究実施校：神奈川県立津久井高等学校(全日制)

実施日：令和7年7月8日(火)

授業担当者：大石 亜希 総括教諭 中村 寿賀子 教諭

3 組織的な探究活動の充実と継承についての成果と課題

(1) 教科等横断的な視点に立った教育課程の開発

「総合的な探究の時間」の指導に学校全体で取り組んでいることが本校の強みである。それを生かし、令和7年度から令和9年度までの3年間、教科等横断的な視点に立った教育課程の開発に取り組んでいる。初年度である令和7年度は、校内で学習会や、外部講師を招聘した講習会を実施した。内容についての教科等横断的な学びでなく、生徒がある教科等で身に付けた知識や技能を他の教科等で用いる連携の仕方について学び、教科等横断的な視点に立った教育課程の開発への手掛かりを得た。学習会や講習会に参加できなかった教員も含め、得られた情報や学んだ内容を学校全体で共有した。さらに、令和7年度は「総合的な探究の時間」の授業改善に取り組んだ。研究の成果は、年度末に報告書にまとめる予定である。

(2) 地域探究ゼミ活動の継承

地域探究ゼミ活動に初めて携わるといふ教員は毎年いる。担当教員全員が、目標を共有し、組織的に指導に当たるため、過去のゼミ活動について説明する研修会を開催した。研修会では、今年度の指導の在り方を議論し、年間の活動計画書を作成した。次年度へ繋ぐ取組として、年度末にはゼミごとに報告書を作成する予定である。

(3) ルーブリックの精査、改善

全教員を対象にルーブリック評価についての説明会を実施した。本校の地域探究ゼミ活動のルーブリックはABCの3段階であるが(表1)、十分に目標を達成してA評価となった生徒が、更に学びを深めるためには、どのように指導し、評価するべきかについて今後も議論を続けていきたい。

表1 ルーブリック

観点：主体的に学習に取り組む態度		
単元の評価規準：自分の意志で課題に向き合い、地域の小学校と連携するなど、協働的に課題に取り組もうとしている。		
単元の目標：よりよく課題を発見し解決していく取組を通じて、地域と連携する重要性を理解し、主体的に社会に貢献する態度を身に付ける。		
	計画面での評価基準	活動面での評価基準
A	自分が気付いたことを生かし、地域の課題解決に向けた目標や計画を具体的に考案している。	自分が気付いたことを生かし、自分の目標に向けて、他の生徒や地域の方と連携して探究活動に取り組もうとしている。
例	・小学生に伝わりやすい話し方を調べ、服の回収をPRする動画の撮影を計画している。 ・小学生に服の回収のアナウンスをするための原稿を作成している。	・小学生の反応を見て、より良く伝える方法や、回収の効率化を図っている。
B	地域の課題解決に向けた目標や計画を具体的に考案している。	自分の目標に向けて、他の生徒や地域の方と連携して探究活動に取り組もうとしている。
例	・服の回収方法を考え、ポスター作成を計画している。	・小学校の協力を得てポスターを貼ってもらい、学校に回収ボックスを設置してもらっている。
C	目標や計画を立てようとしていない。	探究活動に取り組もうとしていない。
例	・目標や計画を準備していない。	・地域での活動に取り組んでいない。
※毎回ルーブリックで自己評価をするのではなく、目標を変更したり、活動したりするタイミングで使用させることを想定しています。		

● 山北高等学校

1 研究テーマ

(1) 研究テーマ

学校所在地の地域社会が抱えている諸問題について、プロジェクト型学習の手法で探究するために必要な基本的スキルを、探究課題に基づき「やまきた未来コンソーシアム」との連携による学びの場の活用を図る。

現地へのフィールドワークなどを通して、地域の情報を収集し、分析する。また、設定した課題に対し、仮説を立て、検証するための手立てを計画し、情報収集、分析、まとめ、発表する方法についても研究する。

(2) 研究のねらい

地域活性化に資する新たな価値の創出に向けて、地域が抱えている諸問題に対し、「特産品」「自然環境」「街づくり」「観光」「福祉」「生涯スポーツ」の六つのテーマから解決策を探る。

その取組の中で、「探究手法の習得」「基礎知識の習得」「情報スキルの習得」「教科等横断による地域学習」を目指す。

プロジェクト型学習を実践するに当たって必要となる各種スキルと基礎知識、情報の扱い方について学習することにより、生徒が主体的に探究活動を行っていくことを目指す。

2 実践事例

(1) 授業のねらい

教育課程の中心に総合的な探究の時間を据え、地域課題に係る課題解決学習に積極的に取り組む。探究の手法を学び、コンソーシアムの協力を得ながら地域課題を探究し、検討した課題解決方法を自治体に提案、実現を目指すことにより、地域人材の育成を図る。

3年間の学習を通して、「個人の成長」を測るため、アンケートや振り返りシートを活用する。各学年、発表の機会を複数回設けることにより、自身の考えを他者に伝えるために必要なスキルを身に付ける。

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
地域の現状や課題について、行政データ、インタビュー、文献などを通じて必要な情報を収集し、整理している。	地域の実態に基づき、解決すべき具体的な課題(問い)を設定し、根拠に基づいた解決策を論理的に提案している。	地域住民や企業、行政機関などと対話・協働し、自身の役割を意識して探究活動を遂行しようとしている。

(3) 各学年の取組

地域を教材とした課題解決型学習に取り組む。

1 学年は地域の実情・現状を「知る」ことを目的とし、山北町を知り、自分なりの課題を発見する。

2 学年は地域の課題解決に向けた方策を「探る」ことを目的とし、六つのテーマごとにゼミ展開の授業を行う。

3 学年は2 学年までの取組を基に、解決策の検討を重ね、「実践する」ことを目的とする。その研究成果の報告会を山北町に向けて行う。

ア 1 学年の取組

1 学年では、プロジェクト型学習を実施するに当たって必要となる各種スキルと基礎知識、情報の扱い方について学習することにより、生徒が探究活動を円滑に実施できるようにする。地域協力団体の指導助言のもとフィールドワークを行い、地域学習を通して、地域を「知る」ことを目指す。

【探究手法を学ぶ講演会】

4 月、桜美林大学高大接続探究プログラム「ディスカバ」クリエイティブディレクターの森谷善隆様を講師にお招きし、探究学習の基本的な心構えと手法について講演いただいた。探究活動のサイクルについて説明を受け、探究活動は新たな問いが続いていき、終わりはないということを学んだ(図1)。

説明を受けた後、ディズニーランドでどのような新しい企画を立ち上げるかを題材にし、グループワークを行った(図2、3)。ショー・パレード・フードメニュー・撮影スポットのいずれかを選び、新たな企画を考える内容であった。自分たちが興味のあるもの、正解のないものを、グループで協力しながらアイデアをまとめていくことによって、短い時間ではあるが、探究活動の方法や楽しさを学ぶことができた。



図1 全体説明



図2 グループワーク

ディズニー研究会 課題1		名前
Mission		
新ショー、パレード、フードメニュー、撮影スポットを提案しよう。		
STEP		
STEP1	テーマを決める	
STEP1	これまでのショーやメニューを調査する	
STEP2	調べたものから傾向を分析する	
STEP3	新しいプランを提案する	

図3 当日ワークシート

【山北町へのフィールドワーク】

7 月、山北町の各所でフィールドワークを行った。山北町の自然や観光、歴史や防災に関わる場所をクラスごとにバスで回った(図5)。丹沢湖や洒水の滝など山北町には豊かな自然が多くあることを知り、バスの道中では特産品である茶について、茶畑の説明を受けた。建設中の新東名高速道路を見学し、完成後にはどのようなになるのかをVRで疑似体験した(図4)。



図4 新東名高速道路
VR疑似体験

山北高校	集合8:40	出発 8:45 帰校 12:30	
平山地区 45分(徒歩)		洒水の滝 農地	
新東名PR館(40分)		PR館に依頼…説明等はお任せ バスP～入口	
丹沢湖 20分 (自由散策)		丹沢湖記念館…特産品 三保ダム ダムの必要性 ダムの歩道からの観察	× 改修工事中 道の駅 山北 15分 山北町の特産品・加工品 どんなもの購入が多いか
玄倉地区 20分		森林災害、水資源	
(車窓) 三保ダム・足柄 茶畑		→ 丹沢湖⇄清水地区へ向かう車窓より説明(足柄茶畑)	
(車窓) 川西屋酒造		→ ①山北町唯一の酒造。創業125年。②銘水の里「山北町」が誇る西丹沢山系の伏流水 ③地元で栽培する農家を推進し奨励した先導者	

図5 1学年フィールドワーク行程表

イ 2学年の取組

2学年では、本研究の中心的な教育活動として位置付け、山北町における諸問題に係る課題の抽出と設定、そのための情報収集と分析を中心とする。「特産品」「自然環境」「街づくり」「観光」「福祉」「生涯スポーツ」の各視点から専門的な知識を得ることで課題解決の実践に向けてプランニングし、RESASを活用したデータ分析等により、解決策を「探る」。

4月から6月までの3か月、各ゼミに分かれ、探究したい内容を個人でまとめ、発表する。その発表内容を踏まえ、2人から4人のグループを作る。

9月以降はそのグループで探究活動を進め、2月に1・2学年合同の探究発表会を実施する。

【山北町商工会による講演会】

5月、山北町商工会青年部による講演会を行った。1学年での取組により、地域の現状や地域が抱える課題について知ることができている。その知識がある中で、実際に山北町で働き、活動されている方の現状を聞いた。

山北の自然を生かした八丁やまめの養殖、森林を伐採した木を使った工芸品、丹沢湖でのSUPやカヌーでの観光業など、地域の環境をいかした様々な取組について知ることができた。

生徒や教員も参加し、実際に丸太を切る体験を行い、林業の困難さを実感することができた。講演会後のアンケート結果からも、このような体験が、生徒の新たな興味・関心につながり、今後の活動の動機付けになっている(図6)。

【ゼミごとの講演会】

9月・10月・11月に講演会や町役場へのインタビューを行った。山北町や周辺地域で実際に働いたり活動されたりしている方からの話を聞くことによって、インターネット等の情報を自分で調べるだけでは知ることができない情報を得ることができ、グループが考えていた地域課題の解決方法についてより具体化して考えることができた。また、教員以外の大人と関わることで、自分の考えを伝える際の言葉の選び方や伝え方、相手からの情報を自分の考えに置き換えていくことなど、普段の学校生活では意識できないことを経験することができた。

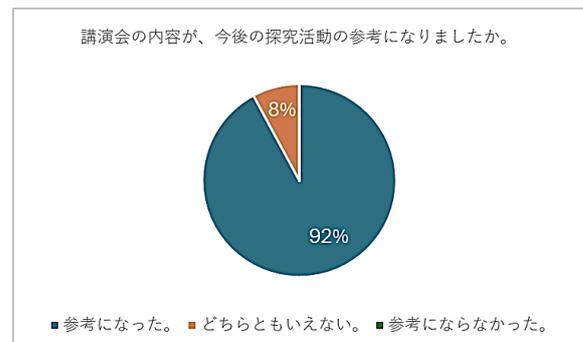


図6 講演会后 生徒アンケート

2学年「未来探究」講演会報告

日時：令和7年9月12日(金) 5校時(13:15～14:05)
 講師：ジーンワークス 池谷 賢 様
 対象生徒：【自然環境・街づくり】ゼミ選択者 50名
 内容：

山北町で、木製製品の製造を手掛けているジーンワークス池谷様より講演いただいた(図7)。

御自身が作られている木製製品の製造過程や完成品の展示等を、動画を用いながら説明いただいた。講演会の最中に、生徒が描いたデザインを木材に加工しキーホルダーを作成していただいた(図8)。

山北町の土地の多くは森林であること、木には寿命があり、現在は、その木を多く使う時期になっていること等を説明いただいた。

インターネットや書籍では知りえないような内容を知ることができ、今後の探究活動に向けて、非常に有意義な講演となった。



図7 講演会の様子



図8 キーホルダーの作成

2学年「未来探究」講演会報告

日時：令和7年9月19日(金) 5、6校時(13:15～15:05)
 講師：合同会社 Provincia 代表 坂下 達郎 様
 対象生徒：【生涯スポーツ】ゼミ選択者 26名
 内容：

小田原市に拠点を置き、ベルマーレフットサルクラブの地域営業も担当されている坂下様より講演いただいた(図9、10)。

スポーツと地域振興との関係に焦点を当て、御自身が経験されてきたことを、高校生に分かりやすい形で説明いただいた。高校生は、これまで「するスポーツ」がメインであったが、「ささえるスポーツ」の重要性について深く掘り下げていただき、オリンピックなどの大きな大会を開催するにあたって、ボランティアの人たちの関わりや、スポンサー企業のことなど、一見してスポーツと関わりが薄いと思いがちなことに対してフォーカスされた内容であった。

生徒たちは、幼児や高齢者向けの活動を主に考えていたが、今回の講演により、活動のターゲットの幅を広げることができた。



図9 講演会の様子「ささえるスポーツ」



図10 講演会の様子「ささえるスポーツ」

2学年「未来探究」講演会報告

日時：令和7年9月19日(金) 5、6校時(13:15～15:05)

講師：かくれ湯の里 信玄館 井上 琴音 様

対象生徒：【観光】ゼミ選択者 72名

内容：

山北町の「かくれ湯の里信玄館」の井上様より講演いただいた(図11)。

山北町の観光についてだけでなく、御自身が発信されているSNSを作成する際の注意点や発信の仕方について説明いただいた。

実際のSNSに発信された動画を見ながら、多くの方に伝わるようにするためのポイントや、動画の長さなど、自分の意図と相手の感じ方について考慮することの大切さや難しさについて説明いただいた(図12)。生徒が現在考えている企画を実現させるためには、思いだけでは不可能であり、自分たちの考えを相手に伝え、協働しながら行う必要があることを再確認できた。



図11 講演会の様子「山北町の魅力」



図12 講演会の様子「動画作成について」

2学年「未来探究」講演会報告

日時：令和7年10月24日(金) 5、6校時(13:15～15:05)

講師：ゆいスポーツクラブ 松下 朗大 様

対象生徒：【生涯スポーツ】ゼミ選択者 26名

内容：

松田町の「ゆいスポーツクラブ」松下様より講演いただいた。

普段、ゆいスポーツクラブで実践されている、高齢者向け・幼児向けの運動教室の内容を高校生に行っていたいただいた。

高齢者対象の運動教室では、急に動くということはせず、体をさすったり、ゆっくり伸ばしていったりと、体温を上げてから主運動に入っていく重要性を学んだ(図13)。

幼児向けの運動教室では、説明の際の言葉の選び方や、幼児に対して目線を合わせて伝えることなどを学んだ。口頭での説明よりも、指導者側が実際に体を動かして、目で見て理解させることの大切さを学んだ(図14)。

生徒が今後、グループで運動内容を考える際の安全面への配慮において、対象年齢によって変えていかなければならないことを理解することができた。



図13 高齢者向け指導の様子



図14 幼児向け指導の様子

2 学年「未来探究」講演会報告

日時：令和7年10月24日(金) 5、6校時(13:15～15:05)

講師：山北町観光協会長 湯川 嘉一 様

対象生徒：【観光】ゼミ選択者 72名

内容：

山北町観光協会長湯川様より生徒とのインタビュー形式での講演をしていただいた(図15、16)。

生徒が事前に用意した質問を行い、それに対して、会長湯川様と事務局長佐藤様より回答いただいた。

生徒の質問の中には、目的が定まっておらず、明確に答えることが難しい質問もあったが、対面でのやり取りにより方向性を定めることができたため、生徒も自分たちのグループが深めていきたい内容を整理することができた。

質問の中には、自分たちで調べれば分かる内容もあったため、準備不足が露呈されてしまった。

観光協会での取組は、自分たちが考えているよりも多岐に渡っており、生徒たちにとって参考になる回答をいただくことができた。



図15 講演会の様子



図16 インタビューの様子

ウ 3 学年の取組

3 学年では、2 学年で深めた提案内容を「実践する」場としてフィールドワークを行う。実際に行動してみることによって、提案内容の検証と改善の実施方法についてさらに検討する。この検証をもとにした改善策の立案と活動から、提案内容の更なるブラッシュアップを行い、新たな価値の創出を目指す。

十分な有用性や継続性が見込める提案については、行政等と連携して試行し、深い学びにつながる新たな価値の創出を目指すとともに、山北町への政策提言につなげる。

【ゼミ内発表会】

11月、全57グループが4会場に分かれてゼミ内発表会を行った。この発表内容を踏まえ、各ゼミから1月に行う「山北町への報告会」の代表グループを選出することとした。

多くのグループが、2 学年までの探究内容を踏まえ、地域の課題解決に向けた企画を考え行動することができた。考えた企画を実現できたグループとできなかったグループがあったが、地域のことを知り、その地域の課題解決のために仲間と行動し、地域の方と協働できた経験は、今後社会に出る時に大いに役立つものになるのではないかと考えられる。

【代表グループによる発表会】

11月28日(金)、6ゼミからそれぞれ選出された代表グループによる探究発表会が、全校生徒の前で行われた(図17)。当日は、生徒だけでなく、山北町関係職員の方や、生徒の探究活動に協働して下さった関係者も招き、発表を聞いていただいた(図18)。500人以上の前での発表が初めてという生徒ばかりであったため、緊張もある中での発表であったが、自分たちが取り組んできた内容をしっかりと伝えることができていた。

○発表グループ① 自然環境ゼミ

タイトル：進化する！山北自然PR

概要：T i k T o kを活用し、山北町の自然の魅力を発信する企画を実現した。町の美しさや特色を伝える動画は、1 か月で約8,800回再生された。山北町の魅力を知ってもらい、SNS拡散による認知度向上や観光誘致につながる効果が期待できる(図19)。

○発表グループ② 生涯スポーツゼミ

タイトル：笑顔はじける！ボッチャ大会

概要：山北町D52祭りで高齢者と若者によるボッチャ大会を開催した。世代を超えた交流を促進し、

高齢者には孤独感の解消や生きがいを、若者には社会性や自尊感情の向上をもたらす。誰もが楽しめる軽運動として運動不足の解消、地域全体の活気とつながりを生み出す企画を提案する(図20)。

○発表グループ③ 福祉ゼミ

タイトル：心と体のすこやか長寿計画

概要：健康長寿を支える運動を目的とした企画である。高齢者施設で季節に合わせたイベントを実施し、手先を使う折り紙などの活動も取り入れる。楽しみや交流の機会を増やすことで、心身の健康を促し、生活の質を高め、長寿につながる環境づくりを目指す。

○発表グループ④ 観光ゼミ

タイトル：山北町アピール ～やまきたにんにくを広めよう～

概要：山北町知名度アップのため〈やまきたにんにく〉を広めようと企画を考案した。文化祭では、ガーリックトーストを試食提供し、販売も行った。地元食材の美味しさを実感してもらい、魅力を広める。食を通じて町の良さを伝え、地域の認知度やブランド力を高める(図21)。

○発表グループ⑤ 特産品ゼミ

タイトル：山北〈愛〉あふれる特産品給食

概要：山北町の特産品を知ってもらうため、山北中学校の栄養士の方と協力して、特産品を使った給食献立を考案し、提供する企画を実現した。給食メニューで山北の食材の良さや地元への〈愛〉を深め、いつまでも山北町を好きでいてほしいとアピールする。

○発表グループ⑥ 街づくりゼミ

タイトル：空き家を古民家カフェに

概要：空き家を活用し古民家カフェを開く企画である。山北町の特産品を使ったメニューを提供し、知名度向上と経済循環を促す。漆喰塗り体験に行きリノベーションの実態を調査し、空き家再生の可能性を探った。町の活性化と観光資源の創出につながる取組を提案する(図22)。



図17 発表会の様子



図18 町関係者の方の参観



図19 自然環境ゼミ



図20 生涯スポーツゼミ



図21 観光ゼミ



図22 街づくりゼミ

3 課題や今後の展望

県立高校改革実施計画(Ⅱ期)の指定が終わり、今年度より新たなスタートとなった。

各学年で取り組んでいく内容を系統化させることができきており、「私たちはこのように考えます」といった考えや思いを伝えるだけの発表から、「こう実行したことによって、こういった反応がありました。そのため今後は〇〇の部分改善していく必要があります」といったように、実際に校外に出て活動した上での発表ができるようになってきた。少しずつではあるが、研究テーマにある「新たな価値の創出」に向けた具体的な活動ができきてきている実感がある。

【課題】

授業時数や週の時間割の組み方、年間指導計画の立て方をより改善させる必要がある。

探究活動を継続して進めていき、探究内容をより深めていくためには、年度をまたいだ活動の継続性や、上級生から下級生への情報・内容伝達が不可欠である。そのため、山北高校では、2学年、3学年に「総合的な探究の時間」を2単位にし、時間割も木曜日の6時間目・金曜日の5時間目と合わせている。1学年も金曜日の5時間目に合わせている。そうすることで、上級生が取り組んでいる内容を下級生に伝達し、連携していくことを模索してきた。しかし実際は、3学年は進路実現に向けたキャリア教育も重なり、年間計画どおりにいかないこともある。そのため、上級生の探究内容の引継ぎ等がうまくいかず、3年間の探究活動が卒業とともに終了してしまい、また似たような内容の活動を下級生が繰り返すといった現状がある。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の探究活動のサイクルを、3年生卒業前に行う「まとめ・表現」で途絶えさせてしまっている現状がある。

【今後の展望】

今後の展望として、学年間における縦のつながりを構築し、学校全体として「総合的な探究の時間」の内容を深めていくことが望まれる。そのために、まずは各学年の年間計画の見直しを行う必要がある。

県立高校改革実施計画(Ⅰ期)の3年間の中で、地域と関わり協働していく過程において、各学年でどのような取組をしていけばよいのかを検討することができた。前述したように、机上の空論で終わるのではなく、「新たな価値の創出」に近づけることができていると感じる。

この状態を持続させ、さらに探究内容を深めていくために、現在行っている3学年の代表グループによる発表会を学校全体で聞くだけでなく、ゼミ内の代表を決める際のゼミ内発表会も下級生が聞けるように、授業計画の見直しを図る。また、2学年が6ゼミに分かれ課題解決に向けた企画を決定する際に、同ゼミの3学年が行っている企画内容を確認し、興味のある内容のグループと情報共有ができるような時間を作ることが必要になる。

課題に挙げたように、3学年は進路実現に向けたキャリア教育もあり、学年を超えて授業の進度を合わせる難しさはあるが、この課題をクリアすることで、探究内容を0から1にしていく作業の繰り返しの状態から、学年が進むにつれて探究内容を深めていけるようになると考えられる。

4 研究協力

○高等学校と地域との協働によるコンソーシアム

(機関名)

神奈川県教育委員会

神奈川県立山北高等学校

山北町

株式会社小田原ドライビングスクール

かながわ西湘農業協同組合山北支店

山北町商工会

相日防災株式会社

NPO法人総合型地域スポーツクラブゆいスポーツクラブ

山北町観光協会

山北町都市農村交流活性化推進協議会

(一社)かながわ地域振興会

○コンソーシアムにおける研究開発協力

地域団体の協力のもとに実施する校外でのフィールドワークへの支援、探究に関するコンソーシアム関係機関から講師として参加、毎年度末に実施する発表会に向けた生徒の探究活動の深化のための協力、発表会への参加及び生徒の発表に対する助言等を行う。

やまきた未来コンソーシアム連絡会議において取組状況等を検証し、協議事項については、広報連携グループと共有し、本プロジェクト全体の推進状況を管理する。